

例えば質問形式で「行ったということをなんといいますか」と聞けばイッタというに決まっているのである。何故なら、方言当事者にとってイッタとイッケとは別物だから「行った」をイッケとは言わない。何度聞いても、しつこく聞いても「言わない」というだけである。「イッケという言い方そのものはあるが、それはイッタとは意味が違う」とまで回答する話者は、めったにいない。言われれば気がつくけれども自ら進んで言う人はこれまでの経験からしてもなかった。その上に、本件にかかる社会環境（共通語化の進行による方言の衰退）がある。

この方言（駿河遠江中部の古いタイプ）には、さらに「イッタッケ」のような言い方もある。これらイッタとイッケとイッタッケの区別は、それが無い人（ほとんど多くの日本人）には分かりがたい区別で、丁度それは英語の「現在完了形」と「過去形」、「過去完了形」の区別が無い日本人にその区別が分からないのと同じ、さらに英語の r と l の区別が無い日本人にその区別が分かり難いのと同一難しさがあると言って良いのではない。この区別については調査者に論文「静岡県方言の過去表現について」（昭和43年「国語学」75）、「静岡県川根町方言の過去表現形式〜ヶについて」（昭和54年「国文学」）があるので参照されたい。

この問題について私の場合は、かねてからの私の関心に基づいてこの事実を報告することが出来るが、この種の事実が無い地域ネイティブ（共通語話者を含む）自身である学者研究者たちに、ほとんど顧みられていないようだ。「区別のあるものにとっては区別が無いことが理解できず、区別のないものにとっては区別があることが理解できない」は、文法カテゴリーに関わる一つの原則のように思われるとしても、少なくとも日本方言のテンス・アスペクトを扱う研究者ならば、すべからくこの問題に関心を持っていただきたい。方言の文法事実については、自然談話において容易に得られるものが対面調査にたいする反応としてしばしば不首尾であるということがある。認識のないことによる調査で、重要な部分の欠落を招きやすいからあえて問題提起をしたい。

その証拠に、といつてははなはだ申し訳ないのであるが、ここに昭和52～57年に方言文法調査として全国規模で行われた国語研究所の「方言文法全国地図」がある（山口も参加）。この平成3年刊行の第2巻92～105図はいわゆる動詞「過去形」を対象としたものであるが、「過去形」という日本文法ももとの用語にも問題がある。実質は「完了形」というべきだったのだ。それは国語研究所がこの調査のために用意した文例モデルを見ても分かる。たとえば「もう仕事に飽きた、仕事を人に任せた、手紙を書いた、包丁を研いだ、飛行機が飛んだ、酒を飲んだ」といった文例自体「過去」の事実というより、目前の完了の事実を言っている。それなのに「過去形」という名がついていて誰も怪しまないという日本文法の常識はどうだろう。それに対する「ッケ」形は全国にわずか1地点、地点番号5624.84（長野県下水内郡栄村）しか現れていないというのは当然とはいえ、どこか間違っていないか。「ッケ」形（カイケ、トンゲ）が豊富にあるはずの静岡県のほか、これまでの文献によって知られる山形県、群馬県、茨城県に当該例がない。「N

「NHK全国方言資料」にそれがふんだんに登場する東京都利島も「文法地図」では全く無縁である。それが捕捉できない「調査」は研究体制および方法に問題があるのではないか。長野県栄村でのみそれが得られているというのは、まさに氷山の一角というにふさわしいが、将来「文法地図」を解釈する研究者がこれをどのように評価するだろうか。それを思うと今になって悔やんでも遅い無念さがある。問題はそのことそのものに意識がない研究体制にある。私自身が当時の調査に参加しているに関わらず、私が主として実際に調査したのは愛知県だったこともあって、この問題を注意できなかったことへの責任がある。なお、質問テーマに用いられた「文例」に欠陥があったとも必ずしも言えない。動詞過去形項目14のうち、「出した、行った」についての文例は「きのう手紙を出した、きのう学校に行った」で、この文例は実質的にも明かな「過去」を材料としている。それにも関わらず「ッケ」形が得られなかったのは、質問調査という質問法自体の本質に問題があることを意味しているのである。

このさい重ねていうことになるが、同地図で「飛んだ、飲んだ」に対する方言形がトツダ、ノツダで現れたのは、全国で長野県木曾郡開田村だけであった。しかしこれも静岡県大井川上流地域（静岡市井川、大川地区、榛原郡本川根町、中川根町一部）ではかねて盛んなものとして知られているが、国研調査ではこの事実が無視されている。国研調査ではその大井川上流地区では本川根町が入っていた（今回扱う中川根町尾呂久保はその「大井川上流」には属さない）から、ここにも調査漏れがあったのだと言わざるを得ない。私自身関係した調査であり、誤解のないように言うておくが、これは調査者や話者の問題というより、現在日本で普通に行われている言語調査のあり方に問題があると言いたいのである。今となっては遅きに失するが、今回の調査企画に、調査表段階で東日本の「ッケ」周辺の事実を積極的に収録しようという姿勢に欠けているのは残念なことだった。この事は、日本語方言のテンス・アスペクトに関する根本的な認識の問題と思われると言ったら酷であろうか。

文法の調査では、ペーパーテスト的な調査表方式とて、私はそれを否定するものではないが、それに加えて自然談話資料をこそ重視すべきであると主張したい。それには格好の、絶好の資料「NHK全国方言資料」「文化庁緊急調査資料」などもあるのであるから、これの活用を呼びかける運動が展開されるべきではなかろうかと愚考する。

（山口幸洋）